

特定非営利活動法人（国税庁認定）  
柔道教育ソリダリティー

### 第7回講演会

「清く・やさしく・美しく」を

モットーに

福田敬子

2009年10月27日

於：講道館

共催：NPO法人柔道教育ソリダリティー、  
「福田敬子先生里帰り実行委員会」

もとよりカナダ、オーストラリア、フランスなど世界各国に向いて柔道を指導し、「世界女子柔道の母」と呼ばれる。1990年、勲四等瑞宝章授章。2006年、女子初となる講道館女子九段を受

ける。同年、「Keiko Fukuda Judo Scholarship」設立、後進の指導・支援にあたっている。

山口 みなさん、こんにちは。本日はこのように多くの方にお集りいただき、ありがとうございます。

それでは、アメリカ・サンフランシスコから福田敬子先生をお招きしての講演会を開催いたします。今日は福田先生とともに、梅津勝子先生、斎藤英子先生もおみえです。私は司会を務めさせていただきます。山口香です。よろしくお願

いします。私はこの2月にある雑誌で女子柔道の歴史について取材するため、サンフランシスコに福田先生をお訪ねしました。その際、先生にたくさんのお話を伺ったものから、「これは私だけが聞いているのではない」との思いを持

ち、「日本の大勢の後輩の前でぜひお話を聞きたい」とお願いしました。半ば強引に先生を口説き落とし、この場にいら

が、梅津先生、斎藤先生にもお手伝い

いただきながら、いろいろなお話を伺え

ところ動転しております(笑)。  
**福田八之助と嘉納治五郎**  
山口 では、私から先生に質問する形で進めましょうか。先生は皆さまもご存じの通り、柔術師範・福田八之助先生のお孫さんでもあります。八之助先生は嘉納治五郎先生の師匠にあたられましたので、敬子先生も柔道を始められた頃から嘉納先生にお目にかかることも

いらしています。皆さんご存じのように、福田先生は96歳におなりです。先日、福田先生が十段の醍醐敏郎先生とお会いした折に、醍醐先生が「私も83歳になりました」とおっしゃいましたら、福田先生は「あら、お若いのね」と(笑)。そうなる私など

まるで赤子のようなものだと思つたものです。先生は、日本のみならず世界の女子柔道に対し、たいへん長きにわたつて大きな貢献をされました。今日は、たくさんの貴重なお話を伺えることと、私たち一同、楽しみにしております。

それでは、先生、どうぞよろしくお願

いします。福田 こんなにたくさんの方においでいただき、心からお礼申し上げます。私は人前で話すことに慣れておりませんので、嬉しいやら恥ずかしいやらの思

います。祖父のことは祖母から聞いたくらいで大した知識はありませんが、今日は皆さんの前で「まず祖父のことを話さなくては」と、頭の中で少し考えて来たもの、こんなに大勢の方々を前に収まっていた持病の震えも出てくる始末で、正直な

福田 そうですね。嘉納治五郎先生は祖父を柔術の最初の師とし、祖父の道場に來られて柔術を始められました。祖父亡き後は、残されたのが祖母と小柄な私の父だったものですから、嘉納先生に「ぜひ道場を継いでほしい」とお願いしましたがままならず、仕方なく道場を閉じたと聞いています。

それから3年後に嘉納先生は道場を開かれました。嘉納先生は祖父を含めて3人の柔術の師をお持ちで、道場を開いて50年経った記念祭の時に3人の先生の御霊をお飾りしたそうです。その式に出た兄から聞くところによりますと、まず初めに祖父の御霊に向かい、あたかも生きてる祖父に向かって語りかけるよう

福田敬子(ふくだ・けいこ)  
1913年(大正5年)、東京生まれ。祖父は嘉納治五郎の柔術師範としても知られる福田八之助。嘉納治五郎より直接誘われ、22歳で講道館女子部に入門。1964年、東京オリンピックで「柔の形」を披露する。1966年、柔道指導のために渡米。翌年、サンフランシスコに「柔港女子柔道クラブ」を設立、アメリカは

ばいになった」と申しおりました。

それから間もなく嘉納先生が私の家  
にいらした折に、私は初めてお目にか  
りました。お茶を差し上げたところ、  
「あなたはリュウウさんに良く似ているね  
と。そんなに父の柳吉に似ているものか  
と思いましたが、程なくして「私のところ  
には女子部があるから、見にきてはどう  
ですか」とおっしゃいました。それから母  
に連れられ、初めて講道館に行ったので  
す。

家では祖母が行儀躰にたいへん厳しく、  
私も足を崩したことなどありませんで  
した。それが講道館の女子部に行つてみ  
ると、女子が足技をかけて投げたりして  
いましたから、「ずいぶん大変な動きを  
するものだ」と思つたのですよ(笑)。  
家に帰つてきてその話をすると、母も兄  
も無理に勧めはしませんでした。自分  
で入門することに決めました。13歳の時  
のことです。

山口 加納先生に初めてお会いした時の  
印象はいかがでしたか？

福田 玄関に外套をお掛けになられた  
ので、ひよいと覗いてみましたらボケッ  
トにキャンデーが入つておりましたよ(笑)。  
先生はあまり背の高い方ではなく、ほつ  
そりした方でした。先生からお話を伺い  
たいという方もたくさんいらつしやいま

したので、嘉納先生に家で講演してい  
ただいたこともありまして。

そういうわけで私は講道館に入門しま  
したが、先生方からは「福田八之助の孫  
だ」というので、何とはなしに良くしてい  
ただきまして、それは今でも感謝してい  
ます。

山口 福田先生のお祖母さまは、嘉納  
先生のことをずいぶんお弟子さんのよ  
うに扱つていらつしやつたそうですね。

福田 そうですね。どういふわけかは分  
かりませんが、よく「嘉納」「嘉納」など  
と呼んでいました。私どもにしてみれ  
ば「祖母はずいぶん好き勝手なことを言  
つてるな」と思つたものです。

祖父の弟子の中に、私どもが「閻魔の  
カネさん」と呼んでいた魚河岸の親玉が  
おりました。嘉納先生はその方に投げ  
られたそうで、「いつかは『閻魔のカネさ  
ん』を投げてやろう」との思いがありが  
だつたのか、洋書をお読みなつて「肩車」  
のような技を編み出し、見事に「閻魔の  
カネさん」を投げたそうです。カネさん  
は祖父の道場でかなり強いお弟子でした  
から、嘉納先生もそれは喜んで  
と聞いています。

### 女子柔道の黎明期に

山口 福田先生が柔道を始められた最

初の思いとは、どんなものだったのでしょ  
う。

福田 初めは楽しいと感じませんでした  
ね。それが1歳違いのお友達が2人でき  
てから、だんだんと楽しくなつてまいり  
ました。当時、女子部の先生は半田義鷹  
先生と、もうおひとり、ハワイで学校を  
開いていた方がいらつしやいました。その  
方が80年経つてハワイから日本に帰つて  
いらつしやる時に連れてきた生徒さんが、  
仲良しのひとりです。もうひとり天皇  
陛下のお召し官の副官長さんのお嬢さ  
んでした。

山口 先生の得意技は何だったんでしょ  
う。

福田 得意技なんてその頃はありませ  
ん(笑)。それを身に付けるには何年も  
かかりますからね。

山口 失礼しました。先生は、東京オリ  
ンピックで乗富政子先生と「柔の形」のデ  
モンストレーションをなさいましたね。

福田 そうです。でも、デモンストレーシ  
ョンをやったことは覚えてるものの、そ  
の時にハラハラしたとかドキドキしたとか、  
そんな記憶はないんですよ。私の次に八  
段の先生がデモンストレーションをやら

て、その後ろ姿の足の太いことを見て「あ  
あ、こういう方が強いのかしら」と思った  
のはよく覚えております(笑)。そんなわ  
けでそんなに緊張はしませんでしたね。  
私どもの後の人たちはデモンストレーシ  
ョンのためにあまり時間はかけないよう  
ですが、私どもの頃はもう一カ月も二カ月  
もかけて十二分に準備をしましたもの  
ですから、人様の前でやるにも緊張しな  
いんですよ。それはとても良い経験にな  
りました。

### アメリカに渡つて

山口 その後、先生は柔道の指導でサン  
フランシスコに渡られたわけですが、なぜ  
アメリカだったのでしょうか。

福田 戦後間もなく、カリフォルニアのオ  
ークランドから、道場を持つていらっしゃる方  
のワ  
イフが習いに来たんですよ。館長さんは  
「乗富先生と福田と二星温子先生の3  
人で教えなさい」とおっしゃつたので3人  
で受け入れました。その方が半年ほどい  
て、帰りがけに私に「船の切符を買つて  
あるから、道場に来て教えてくれな  
い」と言われましたので、館長さんに相  
談したところ、「気を付けて行つてらつし  
やい」と。兄も、「異国で人に教えること  
はとてもいい経験になる。お小遣いが必  
要なら送金するから」と言つてくれたも  
のですから、それで初めてアメリカに渡

りました。

船は貨物船でしたが、日本からピアノを習いに渡米する女性と一緒に、部屋は特別なもの。食事でも上級船員さんたちと一緒にしたから、待遇は良かったですよ。船で一週間ほどかかりましたでしょうか。それから一年半ほどアメリカにいました。帰国後は10年間、講道館女子部で勉強させていただきました。

山口 当時のアメリカの柔道はどのようなものだったのでしょうか。

福田 ずいぶん低かったですよ。ある時、幼稚園の子どもを教えている様子を見ましたら、小さい子ども相手に肩車で投げている。「これは危ない」と思いましたが、同時にいかに柔道の知識が低いかを感じました。そのうち、「アメリカ全土の柔道を指導してください」と言われまして、1年がかりで教えました。

それから10年後、オーストラリアの生徒が講道館に来て「オーストラリアでも柔道を教えてくれないか」と言われまして指導に行き、帰りがけに日本の先生のご紹介でフィリピンにも立ち寄り、そこでも指導しました。フィリピンではどんなふうに使われるのか不安もありましたが、心配は無用で、皆さんがとても温かく迎えてくださいました。4カ所の都市を回りましたが、とても良い思い出

になりました。中には大きな病院の看護師さんもお勢いいらして、その方たちにもお教えしましたよ。

山口 外国の方は身体が大きいですよね。私も小柄ですが、先生もお小さくいらつしやるから、「小さな身体で柔道ができるのか」と馬鹿にされたりするようなことはありませんでしたか？

福田 それは全くなかったですね。でも、ノッポさんの相手を抱えて投げようとしている私の写真があります。そうして見るとやはり小さいんです。大きな相手を抱えて投げようとするものですか。私は両方の親指が外れてしまいました。最初は右手だったのが、その後左手もそうなり、手術したら形が変わってしまったんです。身体が小さいのでありつた力の力で投げようとするために、怪我をしてしまうのでしょうか。

山口 外国では、先生が女性だからといって馬鹿にされるようなことはなかったんですね。

福田 それは一度もありませんでした。それでも、初めてフランスに行った時には全国から生徒が集まり、「80のお婆さんに何ができるのか」との噂が出たといひます。その時は腰が悪かったので、小

さな椅子を持ち歩いて、それを臨時に作った広い畳敷の道場に置いて、40本の投げ技をやりました。するともう「80のお婆さんに何が・・・」などという声は消えてしまったわけです。80歳になつても、けっこう動けるものなんです。その5年後にまたパリに招かれ、技の指導をして帰ってきましたが、良い思い出になりました。

### 梅津勝子先生のお話から

山口 ここで、梅津先生から当時の講道館女子部のお話を伺いたいと思います。今こそ女子も試合で活躍するようになりましたが、当時の女子部の指導方針などはいかがだったのでしょうか。

梅津 私は昭和23年に柔道を始めました。戦後、GHQの禁止が解かれて間もなくのことです。家の近くに道場があり、隣はダンスホールでした。小学校1年生でしたから、「どつちが面白いかなんて両方見ておりました」、「やっぱり柔道がかっこいいな」と。それで「柔道をやりたい」と道場に行きましたら「女のやるものではない」と一蹴され、それから4〜5カ月も粘つた末によく許可されました。その時に言われたのは、「男と同じに取り扱おう」と。つまり、下着も付けず、着替えるところも男子と一緒に、「嫌だったらすぐ止める」ということだったんで

す。博多の近くで十五代300年の歴史を持つ隻流館道場というところ。私はそんなことは全然気にせずに稽古を続け、初段を取りました。

東京に出たのは昭和28年のことです。黒帯を締めて講道館の女子部に行きましたら、「なんだ、あの人は」という目で見られ、技についても「あれはやってはいけない、これもやってはいけない」とずいぶん制限されました。曰く、「それは男の柔道だ。女子は足を開いて倒れたりしない」というわけです。内股はかけない。「払い腰をかけても相手が飛び越えたら内股になる」と言ったところで、そんなことは通用しません。大内刈りもだめ。そんな厳しい中で、教えてもらったのが「形」でした。私は「親を説得してまで来たのに、講道館はこんな所なのか」とがっかりしたものでした。

それで1年間、形を習い、田中道場というところに内弟子に入りました。内弟子ですから家事もやりながら接骨も覚え、毎日、講道館にも通いました。でも、講道館で先生方がやられていたのは「お嬢様稽古」で、きれいに受け身を取るものが主だったのです。その後、外国からマゴという選手が来て、「外国ではもう女子も試合をしている。日本も早くやらないと負けちゃうよ」と話を聞いたので懸命に講道館に掛け合いましたが、聞き入れてはもらえませんでした。「女子

が柔道なんてとんでもない。試合なんてもつての外」というのが、当時の講道館の考え方だったのです。

それで、「試合をやりたかったら外国に行くしかないな」と決心しました。その時、福田先生はすでに外国におられたのか、私が逃げ出したのが先だったでしょうか(笑)。

当時は五段が最高段位でしたが、私は四段で渡航しました。3年程、外国を回ったでしょうか。船旅でしたから何十日も乗っているうちに、自分が何であるかをよく考えたものでした。「人間は、生まれて来た以上は何かをやらなければならぬ」とは私がよく皆さんにお話することですが、人間には生まれた時から毎日、積み重ねている練習があるので。それは今日、ここにいらしている方も必ずやっておられる「歩くこと」です。「ここまでおいで」と手招きしてくれた親のところに進むことから始め、ひとつずつ積み重ね、やがて走り、柔道の稽古やいろんなスポーツができるようになる。このような「下積み」の大切さは、いつも私が実感しているところです。同時に、この歳になり、これからは自分が習ったことを皆さま方に知っていただくことも大事だと思っています。私は乗富先生に師事しましたが、先生は「師範はマツチ一本、折れなければ、一トンを支える力がある。柔道は力学である」と常日ごろからお

しゃっていました。私は先生方のなさる稽古を見ながら、「なるほどな」とどんな「形」にのめり込んでいきました。やればやるほどこんなに難しいものはありません。稽古を重ねると相手の気持ちも自分の気持ちも分かるようになりま

す。こんなに魅力あるものに惹かれたことが、一番うれいしいですね。同時に、こんなにたくさん仲間がいることも、大変うれいしいことなのです。福田先生には、多くのことを教えていただきました。乗富先生、二星先生からも多くを学びました。今日もたくさんの方においでいただいています。皆さんが私にとって宝物です。

山口 ありがとうございます。梅津先生も「嫌だ、嫌だ」と思われながらも根付いてしまわれたように、講道館とはそういう場所なのですね。

では、ここからまた福田先生のお話を伺いましょう。

### 戦後、講道館女子部とともに

福田 では、戦争の頃のことからお話しましょうか。戦争中は道場が空っぽになつてしまい、他の先生方も故郷に帰られてしまったので女子部の担当は私ひとりになつてしまいました。それでもとにかく柔道は続けたいと、寒い夜にはお雑炊など皆でいただきましたながら稽古を続けまし

た。

その後、戦争が終わり、二代目の館長さんのお考えで「女子は護身法ができてはならない」とのことで、永岡秀一先生、佐村嘉一郎先生、三船久蔵先生という3人の大先生の研究が始まり、私と乗富先生は柔道の隅に座つて見学させていただきました。

三船先生が「ああしよう、こうしよう」とおっしゃると、佐村先生が「それではこうしよう」とおっしゃる。そのようなやり取りをしながら、女子の護身法を作つていきました。

一方、それまでは良家の子女ばかりだった講道館女子部でしたが、館長さんの「もつと多くの女子に柔道をやつてもらいたい」との思いから、戦後はすっかり変わつて道場費も安くなり、誰でも入れるようになって60〜70人も女子が稽古をするようになりました。道場は100畳しかありませんでしたから手狭で、私は「今度、建て直す時には200畳にしておさい」とお願いしたことを懐かしく思い出します。女子の柔道が発展するのは難しいと思つておりましたが、それだけ多くの女子が稽古することなどかつてはなかったことで、私にとつても、とても良い思い出です。

また、私が南カリフォルニアで指導を始めた時には、日系二世の家庭がたくさんあり、そのお嬢さん方を大勢、柔道の稽

古に寄越してくださいました。昇段試験の番号が60番にも70番にもなったことを覚えていきます。日系の方が多いので皆さん、柔道のことをよく理解してください。成果を上げることができたと思いま

す。私としては、女子の柔道をもっと盛んにしたいと思います。昔、私たちが講道館女子部で70人も女子を相手にやっていた稽古は、試合をやりたい方には物足りないかもしれませんが、身体のためや精神の精進のためにはとても良い稽古だと思えます。私のような歳になると、

これから柔道を発展させることにあまりお力にはなれませんが、若い先生方のお力でこれからの日本の女子柔道をますます盛んにしていただきたいと思いま

す。今でも思い出しますのは、私が柔道を始めた頃によく拝聴した館長さんの講義のことです。大道場に集まつてお話を伺い、「勢力善用、自他共栄」といったお言葉を耳にしたのですが、人によつては「また親父のあれが始まった」など冗談めいて言う方もおりました。「ああ、そういう人と私とは柔道の学び方が違うんだな」と思ったものです。私はいつも嘉納先生の教えを胸に、柔道のお稽古に励んだつもりです。人間はどうやって正しく生きて行かなくてはならないかを学ぶのは本当に大切なことです。館長

さんはそういうことを説明してくださいのだからと思います。振り返ってみますと、私は一生を通じて嘉納先生の教えを忘れることなく、それに近付こうと努力し続けられたことをうれしく思いますね。

また、私は柔道を通じてオーストラリア、カナダなど、たくさんの方をたたび訪れました。何度となく呼んでいただいていた交流ができたのも、心の中に嘉納先生の教えを忘れずに学んだからこそ、いつも感謝しています。

柔道は技を習う一方で、自分の心の修業もとても大切です。私は自分のモットーとして「強く、やさしく、美しく」という言葉を見出しました。「強く」とは、身体にも精神にも強さが大事なのだということ。「やさしく」とは、柔の深さです。いつも考えていることですが、柔道の「柔」は形によく表れています。弱く見えても、強くてやさしいのです。三つ目の「美しく」とは、心の中の美しさが特に大切だと思つてのことです。誰もが美しいものは好きですし、女性は外見の美しさにとらわれますが、私は常に心の美しい人間になろうと努力しています。

この、「強く、やさしく、美しく」は自分で作ったモットーですが、良い言葉だと思います。中でも「やさしく」については、柔の形をこの歳になつてようやくとことん研究できて、幸いだと思つています。柔の形は、相手の力に決して反抗せ

ず、まっすぐに捉える。なかなかできることではありません。私は、柔の形を生やり続け、やっと神髄が分かつてきて、今は心から幸せだと思つています。

山口 ありがとうございます。今日は、福田先生があまりお話されないのではと心配になり、両脇に梅津先生と斎藤先生にお座りいただきましたが、杞憂に終わったようですね(笑)。いつまでもこうして先生のお話を伺つていたい気持ちです。

ここで、少し質問してもよろしいでしょうか。日本人だからこそ分かる「柔道の心」があると思いますが、アメリカなど外国で指導するにあつてご苦労されたことはありますか？

福田 やはり、英語というか言葉の問題でしょうか。ただし、私の英語は拙いものの、生徒さんから「よく分からない」と言われたことはないんです。多くの国に指導に訪れ、みなさん喜んでくれていろんな場所に案内して下さつたりして、そういうことであまり苦労したことはありませんでした。

山口 実は福田家の方に伺つたところ、先生はお優しく見えるけれど、実はとても気がお強いとか。いかがなのでしょう。

福田 そういふことは、私に聞かれてもわからないですよ(笑)。

### アメリカの愛弟子たちから

山口 今日はアメリカからお弟子さんがおみえですから、ここで福田先生のことを伺つてみたいと思います。福田先生は、どんな先生ですか？

弟子A いつも福田先生から笑顔で「もう一度やつて下さい」と言われます。私にとつて柔道は難しいですが、なかなかできずに苦労していると、先生は笑いながら、その笑顔に愛情が込もつているのを感じて、力になります。

山口 福田先生が素晴らしいことはよく分かりますが、何か失敗談とか面白いエピソードはないでしょうか(笑)？

弟子B 先生はいつも「まじめに勉強して下さい、毎回稽古に参加してください」とおっしゃいます。みんなで協力して勉強するようにと言うのです。私にとつては難しいこともあり、失敗はたくさんありますが、福田先生には間違いや失敗はありません。それに、先生はひとりひとりの弟子が直面している問題をよく理解してくれます。個人個人が自分のできるところで頑張つて、先生から励まされています。稽古中も先生から隠

れることはできないですよ。例えばマットで稽古している時、先生が遠くにいるから見られていないと思つていても、失敗すればすぐに見つかる。稽古の様子をしっかり見てくれてるんです。感動しています。

山口 ここで、福田先生と43年にわたつて一緒に暮らしていらつしやるシエリーさんからも一言いただきます。

シエリー 福田先生がアメリカにいらつしやる前、私は大変苦労しながら柔道をやつていました。福田先生と出会い、私の柔道は大きく進歩しました。先生から刺激を受け、講道館に行つて二星先生や宮島先生など、いろいろな先生にも教えを受けました。

福田先生がアメリカから日本に帰ろうとされた時のことです。手前味噌になりますが、私は大学では結構、優秀な学生でした。ところが体育がとても苦手で、水泳で落第したりしていたのです。それが福田先生と柔道の勉強をするようになり、先生に私の大学で柔道のデモンストラーションをやってもらいたいと思つて大学の職員に相談したら、たいへん驚かれました。「あなたは体育が苦手なのに、柔道なんてできるの？」と。それで福田先生の講義が実現し、私の大学で教えていただくようになったというわけ

です。

先生は素晴らしい方です。日本が世界に送り出したものの中で一番素晴らしいのが、「講道館女子九段・福田敬子先生」だと思います。これまで機会のなかった人にも、福田先生のもとで勉強していただきたいと思います。先生はこれからもお元気でご指導してくださいと思いますから、ぜひサンフランシスコの道場にいらして下さい。

山口 シェリーさん、ありがとうございます。今日はずっと福田先生の横に、斎藤英子先生が付いて下さいました。今回のご帰国も、福田先生から「斎藤先生が行くなら一緒に行ってもいいわよ」と言ってくださったという経緯があります。斎藤先生、一言お願いします。

### 斎藤英子先生のお話から

斎藤 本日は、このような素晴らしい会に出席させていただき、ありがとうございます。福田先生との出会いは、私が13歳で講道館に入った時に遡ります。私は試合をやりたくて柔道を始め、講道館に行く前にも町道場で2年程、柔道をやっていました。兄が柔道をやっており、アジア大会に出場する朝、ユニフォーム姿で家を出る様子を見て、「自分もあんなふうになりたい」と思ったのです。兄が試合で背負い投げをすると、投げられた

人が弾むものですから、みんなが「あれは一本じゃない、二本だ」と(笑)。そんな姿に憧れたのです。

講道館に来て初めて福田先生にお目にかかった時には、一番上の先生とやんちゃなちびっ子だったわけですが、今、アメリカで先生のお側近くでご指導を受け、勉強させていただいています。アメリカで、福田先生は柔道の指導だけではなく奨学金も出していらつしやうて、私はそのスカラシップの委員長を務めさせていただいております。柔道をやっている方の中には恵まれない方もおりますので、そういう方を少しでも助けてあげたいとの福田先生の思いやりが、奨学金になっています。最初は年にひとりだったのが、今は2人ずつ、ある年は「形」の選手を2人、翌年は試合の選手を2人というふうな、500ドルずつ出せるようになりました。

柔道の指導とともにこれらの活動を通して、先生は「柔道を通していかに素晴らしい人間になれるか」ということを必ず教えて下さいます。だから先生はどこに行っても慕われますが、ここに来た時に皆さんが「先生、先生」と声をかけて慕われた、あれが先生の本当のお姿です。私も柔道を始めて50年近くになります。そんな先生の近くにいる幸せです。

最近では、よく50年前の先生方のお話も伺います。本などでは知られていない

嘉納先生のことも再三、お話下さいますので、ありがたいことと思っています。福田先生のご希望は、柔道を通して、これから皆さんに精神面も肉体面も強くなり、試合でも頑張つてほしいということなのです。

もう少し私のことを話させていただきませう。私が柔道を始めたのは試合をやりたいからなのですが、1964年の東京オリンピックの時には14歳で、講道館の紫帯でした。「初段になるように」とのことです。試験を受けまして、「講道館の規定でお免状は上げられないけれど黒帯を締めて良い」ということになりました。

それは、東京オリンピックの時に世界各国から多くの観光団が「稽古をしたい」と講道館を訪れ、そのお相手をするためでした。私は女子の方々と乱取りをして、男子は警視庁の前田先生がお相手なさいまして、2人でお稽古をしました。

翌65年、あの大道場で私は凶々しくも男性と初めて試合をさせていただきました。その時には強い非難もありまして大変でしたが、今、日本の女性が世界で試合をして勝っているのを見ると、大変嬉しく思います。これからも、ぜひ頑張つて下さい。今日は本当にありがとうございます。

### 嘉納先生の教えを胸に

山口 こうして先生方からお話をうか

がついていると、不思議な気持ちになります。梅津先生も斎藤先生も私も、最初は講道館で「やんちゃ」だったんですね。講道館の女子部では今でも「こ機嫌よろしゅうございます」の挨拶から始まりま

す。それもきちつと正座をして、足を崩すなど許されません。私も道場上がりなものですから、いつも講道館に来ると「お行儀が悪い」と叱られて小さくなつていきましたが、皆さん、そうだったんですね。それがだんだん福田先生に矯正されて、今日まで来たのだと思います。

ところで皆さん、先生は96歳におなりなんです。びつくりされていることと思えますが、お肌もツヤツヤしていらつしやる。今日は女性の方もたくさんいらつしやるので、健康と美しさの秘訣もぜひ教えてください。どうぞすれればそんなにお若いられるのでしょうか。

福田 それはお世辞ですよ(笑)。健康のためにには特に何かやっているわけはありません。私は初心者の時、乗富先生に投げられて背骨の下の方にヒビが入っているんです。それが一生付いて回つていますが、とにかくいろんな国を回ることができたことは幸いです。歳を取ると古傷が痛みますが、柔道をやったことに悔いはありません。いつも感謝しています。

一拍手

山口 福田先生、今日は本当にありがとうございました。とても先生が22歳で柔道を始められてから全てのお話を伺うのは難しいのですが、先生のお気持ち、今日は、今日、ここに来られた方々に伝わったことと思います。

最後に、先生にとって「柔道とは何か」を伺いたいと思います。

福田 私は、大事なことは人間としての心の修業だと思います。そのために私は、嘉納先生の教えをいつも心から離れたこととはありません。嘉納先生の教えに沿うように心掛けてきましたし、そんな自分の人生をありがたいと思っています。

山口 嘉納先生が今、福田先生の後ろに立っていらつしやつたら、なんとお声をかけられるでしょう。

福田 「よくやったね」と言って下さるのではないでしょうか(笑)。

―拍手―

山口 先生、今日はお疲れのところ、素晴らしいお話をたくさんお聞かせくださいまして、ありがとうございます。これからお元気で、また来年も再来年もこのような機会を作りますので、ぜひ、いらしていただけますでしょうか。

福田 今、腰が痛んで歩くのも骨の時があります。私の生徒はなにしろ愛情が深く、本当によくして下さいますので感謝しております。今度、来る時には自分ではもうこの世に「さようなら」をしていると思いますよ(笑)。それでも、自分の元気なうちは生徒を指導していきたいと思っています。生徒の昇段の責任は自分にありますから、生徒を愛し、よく仕込んでいきたいと思っています。生徒がどの社会にあつても人の役に立つ、心の広い人になつてもらいたいと思っています。

山口 今日、ここに来られているのは先生の日本の生徒さんで、私もそのひとりだと思っております。先生にはこのように日本の生徒さんもたくさんおられますから、どうぞお忘れなく、これからお元気で活躍ください。今日は本当にありがとうございます。